

《ワークショップ意見》 日頃「食と農」について考えていること

	意見	講師コメント
1	我が子を見ていて思うに、種まきから収穫までの過程を知ると、苦手な野菜も食べてみようと思うようだ。土に触れることも大切に思う。	
2	「食と農」は密接な関係だが、離れて考えがちになるが、一緒に考えて初めて食が成り立つので、感謝の気持ちを持つてと思う。	
3	食卓と畑の距離が少しでも近づけばと思う。総合の時間が減る中、どの単元で食農が学べる場を作るか、課題だと思う。自分が育てた野菜への愛着は多くの効果を子どもたちにもたらすと思う。	家庭科の先生と仲良くなって一緒に授業をするとよい。中学校の先生が頑張って食育をして欲しい。
4	子どもたちに野菜を育ててもらえるような活動がもっと身近に、そして、たくさん時間でできれば良いと思う。が、なかなかその「場」も「時間」もないのが現状で、それをなんとかできないかなと思う。	学校と地域の時間が合っていない。
5	子どもたちにも農を体験させることによって、食べ物についてもっと興味を持ってもらいたいと思う。	
6	子どもに農を体験させてやりたいが、なかなかそういうチャンスがない。今、工場見学が人気のように、農業にもそういう環境があるといいと思う。	「工場見学」のように「農場見学」をしてはどうか。
7	食育、食育とは言っても、自分自身が農業との関わりが薄く、知らないことばかりです。食と農を合わせて学ぶことで、知識がより深く、具体的なものになり、食育に活かせると思う。	私が伝えたかったことだ。
8	今はできたものを何の苦労もなく食べている。作る人の苦労も知らずに、食べたくなければ残すという。何か大切なものが失われてきているように思う。体験は必要！！	教える側も知らないことが多いが、「知らない」ということを自覚できるかが大切。
9	食べ物は農家の方が苦労して育てているおかげで私たちの食卓に上がっているということを、普段の生活では忘れがちになってしまう。しかし、「農」が私たちの生活にすみずみまで影響してしまうことを最近とても感じて、日本はもっと「農」に目を向けて大切にしていけないといけないと思う。	いろいろな教科で取り組んでいって欲しい。子どもたちに折に触れて伝えたい。
10	地元で採れた野菜、旬の野菜を多く取り入れた献立を考えているが、時期がずれたり、採れる時期がずれ、毎年大変だと思う。	
11	日頃、子どもたちには、栄養士としての立場から栄養面の話に走りがちなのがしている。「残さず食べよう」と話すときの背景に、常にいただけることに対する感謝の気持ちと生産者の方々に「ありがとう」という思いを伝えていかなければいけないと感じている。	栄養士は学ぶ機会があれば学ぼうと、一生懸命真面目に取り組んでいる。学級担任も見習ってほしい。
12	給食を通して、子どもたちに自分たちの地域を知ってもらえるよう、地元で採れた食材をたくさん使用するようにしている。生産者の思いも、しっかり伝えていきたいと思う。	誰が生産したか、誰が調理したかを知ると子どもも食べたくなる。

《ワークショップ意見》 日頃「食と農」について考えていること

	意見	講師コメント
13	今日はありがとうございます。日頃子どもたちの食事の様子を見ながら、大地に実った作物の様子を見せてあげたいなと思っている。健康に命をつなげていけることは、大地の恵みを知り、感謝の気持ちを持ち、食べ物を大切にしたいと思ひ、また同時に、次世代が安心していただける作物を十分に収穫できるよう考えていく必要があると思っている。	
14	給食で地産地消に取り組むようになって、今日の食材がどこで作られているのか、どんな人が作っているのかということに関心を持つようになった。また、食材を農家の方に届けてもらうようになって、とても安心して使うことができた。直接関わることで食材に対する思いなどを聞くことができ、作業するときの気持ちも変わったような気がする。子どもたちにもそういう方と関わったり、自分たちで作ったりする体験・経験は大切だと思う。	(6、11月第3週「地産地消週間」) 「地産地消」の価値を社会科の授業などで取り上げてはどうか。 農の人とつながると、食材の活かし方も今以上に深まるのでは。 栄養士・学級担任・生産者が一緒になって授業をして、子育てできれば良い。
15	世界の中には食べるものがなく、ひもじい思いをしている子が多くいると子どもたちに話すが、今一つ実感として感じとれないようだ。おいしい農産物が自由に食べられる幸せをありがたいの気持ちを持てるよう、農業の栽培の大変さや苦勞、作る人の気持ちなどを通して知らせなければいけないと思う昨今です。	
16	自然や食物への関心を深めていくことに一番重要なことが農業体験ではないか。	ちゃんと生活するための学習(技術、経験など)が必要。 ちゃんと生活するための学習というのは、学校の生活科や総合学習や家庭科でできる学習である。 マニュアルがあっても、実際には、技術や経験による「加減」や「適当」である。
17	農業体験は、野菜などができるまでの苦勞や喜びを知ることができるので、子どもたちにももっと身近にできたらいいなと思った。地域で野菜を作られている家庭が多いが、野菜の苦手な児童も多いので、農業の大切さや作ってくださる方への気持ちなど伝えられたらいいのになと思った。	「地産地消週間」などの時、意図的に社会科の授業などに取り込んでもらう。 給食の献立を立てる時に、人も盛りつけてコーディネートしてほしい(その食材の生産者などに来て話をしてもらう)。
18	「食」を仕事にしても、「農」とつなげて考えることは少なく、子どもの体験はおいしいとこどりになりがちだが、それでもしないよりした方がいい。食卓と畑のつながりを感じてほしい。	
19	子どもたちは農業体験をすることも少なく、野菜などがどのように作られているかも知らない子が多く、食のありがたさを感じることがないため、体験をすることは大切だと感じた。	